

# チャイルドシート使用に関する安全意識と負担感 —父親と母親の違いについて—

## Safety Awareness and Workloads Associated with the Use of Child Restraint: Comparison by Parents' Gender

高原 美和\*

Miwa TAKAHARA

### 要 旨

本研究では、シートベルトと比較して使用率が低いチャイルドシートについて、その原因を明確にするために、全国316名の子育て中の父親と母親を対象に、チャイルドシート利用に関する負担感と安全に対する知識・認識についての調査を行った。その結果、常にチャイルドシートを使用する母親は、悪天候、荷物が多い、子どもの機嫌が悪い等の場面で父親よりも負担感が高くなった。チャイルドシートの正しい知識や安全に使用する意識は母親で高く、父親で低い傾向にあった。ただし、母親は子どもの機嫌や周囲の目を理由にチャイルドシートを使用しない可能性が示された。結果から、チャイルドシートの利用促進のためには、駐車環境の改善や安全性に対する父親の理解を進めることが必要であることが考えられる。

キーワード：チャイルドシート、安全性、負担感、父親、母親

### 1. 序論

日本では乗車中の子どもの事故を低減するために、2000年から6歳未満の子どもの乗車させる場合はチャイルドシートの使用が義務付けられている。しかし、警察庁(2022)によると、2002年の52.4%と比較すると増えているものの、2022年のチャイルドシート使用率は74.5%にとどまっている。また、取り付けられていてもミスユースが34.8%と報告されており、義務化から20年以上経っているにも関わらず、使用が徹底されているとはいえない。このような状況に対して、主に医療従事者が乗車中の子どもの安全性(Child Passenger Safety: CPS)を理解して、妊婦や家族に教育する必要性が指摘されている(椿・中嶋・山田・町浦, 2013; 中田・江幡, 2013; 井上・小松原・岸部・酒谷, 2015)。

椿他(2013)は、CPSへの対策が進んでいる欧米の研究を調査し、日本で重要となる介入方法について分析した。結果、CPS意識が低い集団への教育プログラムが重要であること、また、チャイルドシートの重要性を伝える教育プログラムとしては、妊娠中から視聴覚教材やハンズオン教育を継続的に行うことが効果的であることが示された。日本においては特に医療者がCPS意識を持ち、妊婦と家族の教育を行う役割があると

\* 愛知淑徳大学人間情報学部

も指摘した。中田・江幡（2013）は、乳児を持つ母親のCPSに関する知識や認識がチャイルドシートの使用程度と関連するかについて検討した。結果から、チャイルドシートを常に使用しない母親はCPSに対する知識や認識が十分ではないことが示された。従って、特に母親と関わる機会の多い助産師が正しい知識や認識を家族に提供する必要があるとした。CPS意識向上のために、井上他（2015）は医療者の理解を促進するための啓発映像を制作した。小児科及び産科の医療関係者を対象としてCPSの重要性を理解し、関係する家族への働きかけが増えるよう、それぞれの科に合わせた5分程度の映像を制作し、医療者の態度変容を調べた。結果、映像を見ることによって理解が深まり、具体的事例に触れることで指導を考えるきっかけになることが示唆された。ドライバへの直接的な指導という点では、日本自動車連盟はホームページでチャイルドシートの取り付け方法を動画で紹介したり、取り付け点検講習などを実施したりしている（日本自動車連盟, 2022）。しかし、CPS意識は医療関係者からのアプローチだけで改善できるとは考えられないし、企業が適切な教育コンテンツを用意しても強制力はないため、CPS意識が低い層に効果が発揮できるとはいえない。

一方で、CPS意識の低さは知識がないということではなく、日常生活の中でチャイルドシート使用に対する判断基準が甘くなっている可能性も考えられる。チャイルドシートに対する認識について、中田・江幡（2013）は「近所への買い物程度なら不要」や「周りが装着していなければ大丈夫」といった都合の良い解釈をする傾向を指摘している。このことは母親たちがチャイルドシート使用の際に、自分に都合の良い解釈をしてしまう何らかの背景が存在することを示している。そうであるならば、その背景を明確にしない限り都合の良い解釈は減らず、チャイルドシートの使用率も改善できない。また、チャイルドシートを使用するのは母親だけではない。同じ親でも異なる役割を担うことが多い父親の知識や意識を調べることも、CPS意識の改善には重要と考えられる。

そこで、本研究ではどのような時に使用されにくくなるのかを特定するために、チャイルドシートの利用場面をいくつか想定し、利用者の負担感を評価する。負担感が大きい場面ではチャイルドシートが使用されにくくなると考えられる。また、中田・江幡（2013）の知識と認識に関する質問調査を用いて、チャイルドシートに対する理解度を調べた。全ての調査において父母間の比較を行う。先行研究では、家庭内で意見の相違があることは想定されていなかったが、実際には役割分担が存在するため、父親と母親の立場によってチャイルドシートに対する考え方や理解が異なることは十分考えられる。場面や立場・役割によってチャイルドシートへの態度が変化するのであれば、特定された場面・人に対して効果的な対策を考えることが可能になる。

## 2. 方法

### 2.1 調査手続きと参加者

2019年12月にWeb調査会社（株式会社マクロミル）を利用し、日本在住で6歳未満の児童を養育中である父母316名に回答を依頼した。回答は全国の8地域（北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州）から同程度の人数になるよう収集された。北海道と四国のみ父母各19名が参加し、それ以外の地域は父母各20名が参加した。参加者は世帯に関係なく独立で集められた。

### 2.2 質問項目

質問は、属性、運転状況、チャイルドシートの使用状況、チャイルドシート利用に関する負担度、チャイルドシートの知識、チャイルドシートの認識の6カテゴリに分けられていた。各カテゴリの質問内容は表1に示す。チャイルドシートの知識及び認識の各項目は、中田・江幡（2013）で使用されたCRSの知識と認識の質問（知識15項目、認識16項目）を使用した。知識では、チャイルドシートの法令に関する理解度を質問し、認識では、チャイルドシートに対する意識や印象について質問した。回答は、1「まったく思わない」、2「ややそう思わない」、3「どちらともいえない」、4「ややそう思う」、5「とてもそう思う」の5段階で評価させた。

設問が正しい知識の場合は、選んだ番号どおり、設問が正しくない知識の場合は、逆転項目として、5「まったく思わない」、4「ややそう思わない」、3「どちらともいえない」、2「ややそう思う」、1「とてもそう思う」として点数化した。

表1 質問のカテゴリと内容

質問のカテゴリ	内容
属性	年齢、性別、子ども（6歳以上、6歳未満）の人数、子ども以外に同居する家族（複数選択可）、最終学歴、職業、世帯年収、居住地域
運転状況	免許の有無、運転歴、年間走行距離、運転頻度、所有車両数、車両の種類（複数選択可）
チャイルドシートの使用状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自家用車でのチャイルドシート着用率（0-100%で回答）</li> <li>・両親・親戚が運転する車でのチャイルドシート着用率（0-100%または「乗せることがない」で回答）</li> <li>・友人・知人が運転する車でのチャイルドシート着用率（0-100%または「乗せることがない」で回答）</li> </ul>
チャイルドシート利用に関する負担度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いずれも、1（かなり低い）～6（かなり高い）の6段階評価</li> <li>・チャイルドシートを車に設置する時</li> <li>・天気の悪い日に子どものチャイルドシートを着脱する時</li> <li>・狭い駐車場で子どものチャイルドシートを着脱する時</li> <li>・荷物が多いた時に子どものチャイルドシートを着脱する時</li> <li>・子どもの機嫌が悪い時にチャイルドシートを装着する時</li> <li>・子どもをベビーカーからチャイルドシートに移して装着する時</li> <li>・子どもを抱っこ紐からチャイルドシートに移して装着する時</li> </ul>
チャイルドシートに対する知識	中田・江幡（2013）のCRSの知識15項目を使用
チャイルドシートに対する認識	中田・江幡（2013）のCRSの認識16項目を使用

### 2.3 分析方法

属性、運転状況、チャイルドシートの使用状況については値で回答されるものは平均値を、選択肢で回答されるものは各選択肢の割合を求めた。チャイルドシート利用に関する負担度、チャイルドシートに対する知識、チャイルドシートに対する認識については、チャイルドシートを常に着用する群（以下、常用群）と着用しないこともある群（以下、非・常用群）に分け、それぞれの群で父母の回答に違いが見られるかについて $\chi^2$ 検定、及び残差分析を行った。

### 2.4 倫理的配慮

参加・中止の自由やプライバシーの保護は事前に説明し、回答の送信をもって同意とした。本研究は、愛知淑徳大学人間情報学部の倫理審査委員会による承認を受け実施した。

## 3. 結果

### 3.1 属性と運転状況

参加者は、父親では25歳から44歳の158名、平均年齢は36.19歳、母親では25歳から44歳の158名、平均年齢は33.36歳であった。世帯年収は、父母とも400～1000万未満の間に70%以上が含まれていた。職業は父親では会社員が77.22%、母親では専業主婦が60.76%で最も多かった。子どもの平均人数は父母それぞれ1.90人と1.82人となった。同居家族は、配偶者以外の回答は少なく（父親14.21%、母親12.57%）、核家族家庭が多かった。最終学歴については、父母ともに4年制大学が最も多かった（父親47.47%、母親38.61%）。

運転免許は、父親は全員が所持、母親も97.47%が所持しており、運転歴は父親16.45年、母親11.58年だった。年間走行距離は、父親は母親の約2倍で（父親16607.21km、母親8194.41km）、運転頻度も「ほぼ毎日」

が67.09%と母親の55.70%よりも多かった。一方、未就学児を乗せて運転する頻度は、「ほぼ毎日」は父親15.82%に対して46.20%と母親の方が多かった。未就学児を乗せる車両数については、父親1.63台、母親1.54台で差異はなかった。所有車両の種類は、父母ともに軽、コンパクトカーの合計が半分以上を占めていた（父親56.50%、母親58.71%）。

### 3.2 チャイルドシートの使用状況

結果を表2に示す。自家用車で常に着用する人の割合（以下、着用率）は父親80.26%、母親75.48%であった。警察庁（2022）と比較するとやや割合が高いものの、着用しないことがある人も2割程度いることが示された。親族が運転する場合では、着用率は父親78.63%、母親60.63%となった。知人が運転する場合では、半数程度が「乗せることがない」という回答だったが、乗せる場合の着用率は父親85.23%、母親54.67%となった。父親では、誰が運転するかによって着用率が大きく変化することはなかったが、母親では、他者が運転する時には着用率が15～20%程度低下することが示された。

表2 チャイルドシートの使用状況の結果

車両	チャイルドシート着用に関する質問項目	父親	母親	
自家用車	着用状況	100%着用する	122 77.22 (%)	117 74.05 (%)
		着用しないことがある	30 18.99	38 24.05
		無回答	6 3.80	3 1.90
	着用率（無回答除く）	80.26 (%)	75.48 (%)	
親族が運転する車	着用状況	100%着用する	92 58.23 (%)	77 48.73 (%)
		着用しないことがある	25 15.82	50 31.65
		乗せることがない	41 25.95	31 19.62
	着用率（乗車する人のみ）	78.63 (%)	60.63 (%)	
知人が運転する車	着用状況	100%着用する	75 47.47 (%)	41 25.95 (%)
		着用しないことがある	13 8.23	34 21.52
		乗せることがない	70 44.30	83 52.53
	着用率（乗車する人のみ）	85.23 (%)	54.67 (%)	

### 3.3 チャイルドシート使用に関する負担度

結果を表3に示す。『車に設置する時』については、“常用群”において（ $\chi^2=15.07$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.251$ ）, 「比較的低い」という回答が父親に多く、母親に少ないことが示された。『天気が悪い日に着脱する時』については、“常用群”において（ $\chi^2=18.49$ ,  $df=5$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.278$ ）, 「やや低い」という回答が父親に多く、母親に少ない, 「かなり高い」という回答が母親に多く、父親に少ないことが示された。『荷物が多い時に着脱する時』については、“常用群”において（ $\chi^2=23.47$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.313$ ）, 「比較的高い」という回答が母親に多く、父親に少ないことが示された。『子どもの機嫌が悪い時に装着する時』については、“常用群”でも“非・常用群”でも父母の違いが見出された（それぞれ,  $\chi^2=17.26$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.269$ ,  $\chi^2=13.47$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.445$ ）。まず, “常用群”は「かなり高い」という回答が母親に多く、父親に少ないことが示された。次に, “非・常用群”は「やや低い」という回答が父親に多く、母親に少なく, 「かなり高い」という回答が母親に多く、父親に少ないことが示された。『ベビーカーから移して装着する時』については, “常用群”において父母の違いが見出され（ $\chi^2=16.47$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.262$ ）, 「やや低い」という回答が父親に多く、母親に少ない, 「かなり高い」という回答が母親に多く、父親に少ないことが示された。

チャイルドシート使用に関する安全意識と負担感

表3 チャイルドシート利用に関する負担度の評価結果

利用場面	回答	常用群		非・常用群		
		父親 N=122	母親 N=117	父親 N=30	母親 N=38	
車に設置する時	かなり低い	度数	23	18	0	4
		調整済み残差	.7	-7	-1.8	1.8
	比較的低い	度数	23	5	4	6
		調整済み残差	<b>3.5</b>	<b>-3.5</b>	-3	.3
	やや低い	度数	24	23	6	11
		調整済み残差	.0	.0	-8	.8
	やや高い	度数	27	37	11	6
		調整済み残差	-1.7	1.7	2.0	-2.0
	比較的高い	度数	16	21	5	8
		調整済み残差	-1.0	1.0	-5	.5
かなり高い	度数	9	13	4	3	
	調整済み残差	-1.0	1.0	.7	-.7	
天気が悪い日に 着脱する時	かなり低い	度数	26	14	1	2
		調整済み残差	1.9	-1.9	-0.4	0.4
	比較的低い	度数	15	10	5	2
		調整済み残差	0.9	-0.9	1.5	-1.5
	やや低い	度数	19	8	8	8
		調整済み残差	<b>2.1</b>	<b>-2.1</b>	.5	-.5
	やや高い	度数	28	34	8	8
		調整済み残差	-1.1	1.1	0.5	-0.5
	比較的高い	度数	21	18	6	13
		調整済み残差	0.4	-0.4	-1.3	1.3
かなり高い	度数	13	33	2	5	
	調整済み残差	<b>-3.4</b>	<b>3.4</b>	-9	.9	
荷物が多い時に 着脱する時	かなり低い	度数	25	15	2	2
		調整済み残差	1.6	-1.6	0.2	-0.2
	比較的低い	度数	14	13	4	6
		調整済み残差	0.1	-0.1	-3	.3
	やや低い	度数	19	11	7	7
		調整済み残差	1.4	-1.4	.5	-.5
	やや高い	度数	42	38	11	9
		調整済み残差	0.3	-0.3	1.2	-1.2
	比較的高い	度数	12	26	1	5
		調整済み残差	<b>-2.6</b>	<b>2.6</b>	-1.4	1.4
かなり高い	度数	10	14	5	9	
	調整済み残差	-1.0	1.0	-7	.7	
子どもの機嫌が 悪い時に装着する時	かなり低い	度数	22	13	0	1
		調整済み残差	1.5	-1.5	-0.9	0.9
	比較的低い	度数	12	8	5	2
		調整済み残差	0.8	-0.8	1.5	-1.5
	やや低い	度数	23	13	7	2
		調整済み残差	1.7	-1.7	<b>2.2</b>	<b>-2.2</b>
	やや高い	度数	34	25	7	8
		調整済み残差	1.2	-1.2	0.2	-0.2
	比較的高い	度数	15	19	6	5
		調整済み残差	-0.9	0.9	.8	-.8
かなり高い	度数	16	39	5	20	
	調整済み残差	<b>-3.7</b>	<b>3.7</b>	<b>-3.1</b>	<b>3.1</b>	
ベビーカーから 移して装着する時	かなり低い	度数	26	31	1	6
		調整済み残差	-9	.9	-1.7	1.7
	比較的低い	度数	19	11	7	5
		調整済み残差	1.4	-1.4	1.1	-1.1
	やや低い	度数	41	20	5	11
		調整済み残差	<b>2.9</b>	<b>-2.9</b>	-1.2	1.2
	やや高い	度数	24	29	13	9
		調整済み残差	-1.0	1.0	1.7	-1.7
	比較的高い	度数	7	10	2	4
		調整済み残差	-0.8	0.8	-6	.6
かなり高い	度数	5	16	2	3	
	調整済み残差	<b>-2.6</b>	<b>2.6</b>	-2	.2	

注) 網掛け・太字は残差分析が5%で有意であることを示す。

## 3.4 チャイルドシートに対する知識

全体の結果を表4に示す。6項目において父母の違いが示された。

表4 チャイルドシートに対する知識の結果

※逆転項目

質問項目	項目の種類	常用群				非・常用群			
		父親 (N=122)	母親 (N=117)	$\chi^2$	Cramer V	父親 (N=30)	母親 (N=38)	$\chi^2$	Cramer V
Q1	チャイルドシートを着用している時と、着用していない時とでは、それほど死亡率は変わらない。	誤※	4.42	4.73	*	0.211	4.23	4.79	0.329
Q2	3列シートの最後列は安全なので、6歳未満でも最後列に乗せる場合にはチャイルドシートは必要ない。	誤※	4.20	4.62	**	0.243	4.30	4.61	0.219
Q3	チャイルドシートは助手席に取り付けた方が、安全である。	誤※	3.85	4.50	***	0.325	3.87	4.53	0.359
Q4	チャイルドシートの肩ベルトは、子どもが嫌がらないように緩めて締める	誤※	3.83	4.19		0.180	3.97	4.00	0.143
Q5	時速30km程度の走行なら、チャイルドシートを装着しなくてもそれほど危険ではない。	誤※	4.19	4.71	***	0.322	4.17	4.66	0.305
Q6	チャイルドシートは事故の時しか役立つはない。	誤※	3.94	4.17		0.138	3.77	4.00	0.226
Q7	国内で販売されているチャイルドシートは、全メーカーとも取り付け方が統一されている。	誤※	3.41	3.44		0.085	3.57	3.58	0.185
Q8	子どもがチャイルドシートを嫌がったり、泣いたりした場合は例外として無理に使用しなくても良い。	誤※	3.98	4.27		0.085	3.57	3.55	0.185
Q9	一般的にエアバッグが装着されている助手席には、チャイルドシートを取り付けない方が良い。	正	3.51	3.97	*	0.232	3.13	4.08	* 0.334
Q10	チャイルドシートは車の座席(背もたれ)との間に少し余裕をもたせて取り付けの方が良い。	誤※	3.56	3.99	*	0.222	3.73	3.84	0.265
Q11	乳幼児のチャイルドシートは前向きではなく、後ろ向きに装着したほうが安全性は高い。	正	3.48	3.65		0.168	3.23	3.61	0.245
Q12	6歳未満の乳幼児を車に乗せる場合には、チャイルドシートの使用が義務であり、使用しないと原則的に違反点数が1点減点される。	正	3.80	3.93		0.139	3.43	4.00	0.290
Q13	やむを得ず乳児用のチャイルドシートをエアバッグのついている助手席で使用する場合、座席を一番後ろまで下げてから、前向きに取り付ける。	正	2.90	3.11		0.159	2.77	2.87	0.248
Q14	乳幼児のチャイルドシートのリクライニングの理想の角度は60度である。	誤※	3.02	3.06		0.154	2.97	2.89	0.289
Q15	授乳やオムツ替えなど、日常生活上欠かせない世話をする場合、チャイルドシートの使用義務が免除される。	正	2.47	2.40		0.189	2.87	2.84	0.335

注) 表における評価の平均値は参考値である。

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

まず、“常用群”においてのみ父母の違いが見出された項目について報告する(表5)。『チャイルドシートを着用している時と、着用していない時とでは、それほど死亡率は変わらない(誤)』( $\chi^2 = 10.61$ ,  $df = 4$ ,  $p < .05$ ,  $Cramer V = .211$ )では、「どちらともいえない」は父親に多く、「まったく思わない」は母親に多いことが示された。『3列シートの最後列は安全なので、6歳未満でも最後列に乗せる場合にはチャイルドシートは必要ない(誤)』( $\chi^2 = 14.09$ ,  $df = 4$ ,  $p < .01$ ,  $Cramer V = .243$ )では、「どちらともいえない」は父親に多く、「まったく思わない」は母親に多いことが示された。『チャイルドシートは助手席に取り付けた方が、安全である(誤)』

チャイルドシート使用に関する安全意識と負担感

( $\chi^2=25.27$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.325$ ) では、「どちらともいえない」「ややそう思う」「とてもそう思う」は父親に多く、「まったく思わない」は母親に多いことが示された。『時速 30km 程度の走行なら、チャイルドシートを装着しなくてもさほど危険ではない (誤)』( $\chi^2=24.84$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.322$ ) では、「どちらともいえない」「ややそう思う」は父親に多く、「まったく思わない」は母親に多いことが示された。『チャイルドシートは車の座席 (背もたれ) との間に少し余裕をもたせて取り付けた方が良い (誤)』( $\chi^2=11.74$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.222$ )。では、「どちらともいえない」は父親に多く、「ややそう思わない」は母親に多いことが示された。

表 5 男女差が示された項目における残差分析の結果

		“常用群”のみ父母間の差が示された項目					※逆転項目		
質問項目	項目の種類	性別	1	2	3	4	5		
Q1	チャイルドシートを着用している時と、着用していない時とでは、それほど死亡率は変わらない。	父親	度数	2	3	17	20	80	
			調整済み残差	0.54	0.40	2.58	1.39	-3.06	
		母親	度数	1	2	5	12	97	
			調整済み残差	-0.54	-0.40	-2.58	-1.39	3.06	
Q2	3列シートの最後列は安全なので、6歳未満でも最後列に乗せる場合にはチャイルドシートは必要ない。	父親	度数	2	5	26	23	66	
			調整済み残差	1.39	0.66	2.54	1.47	-3.56	
		母親	度数	0	3	11	14	89	
			調整済み残差	-1.39	-0.66	-2.54	-1.47	3.56	
Q3	チャイルドシートは助手席に取り付けた方が、安全である。	父親	度数	6	9	32	25	50	
			調整済み残差	2.43	2.52	2.99	-0.79	-3.44	
		母親	度数	0	1	13	29	74	
			調整済み残差	-2.43	-2.52	-2.99	0.79	3.44	
Q5	時速 30km 程度の走行なら、チャイルドシートを装着しなくてもさほど危険ではない。	父親	度数	1	7	25	24	65	
			調整済み残差	-0.03	2.10	4.04	0.69	-4.13	
		母親	度数	1	1	4	19	92	
			調整済み残差	0.03	-2.10	-4.04	-0.69	4.13	
Q10	チャイルドシートは車の座席 (背もたれ) との間に少し余裕をもたせて取り付けた方が良い。	父親	度数	8	19	34	19	42	
			調整済み残差	0.78	1.89	1.99	-2.08	-1.58	
		母親	度数	5	9	20	31	52	
			調整済み残差	-0.78	-1.89	-1.99	2.08	1.58	
両群において父母間の差が示された項目									
質問項目	項目の種類	着用状況	性別	1	2	3	4	5	
Q9	一般的にエアバッグが装着されている助手席には、チャイルドシートを取り付けられない方が良い。	常用群	父親	度数	12	16	32	22	40
				調整済み残差	1.38	0.91	2.61	-2.01	-1.72
			母親	度数	6	11	15	34	51
		調整済み残差		-1.38	-0.91	-2.61	2.01	1.72	
		非・常用群	父親	度数	4	5	9	7	5
				調整済み残差	1.16	1.11	1.71	0.23	-3.05
母親	度数		2	3	5	8	20		
調整済み残差	-1.16	-1.11	-1.71	-0.23	3.05				

注) 網掛け・太字は残差分析が5%で有意であることを示す。

一方、“常用群”でも“非・常用群”でも父母の違いが見出されたのは、『一般的にエアバッグが装着されている助手席には、チャイルドシートを取り付けられない方が良い (正)』(それぞれ、 $\chi^2=12.88$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.232$ ,  $\chi^2=10.58$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.394$ ) で、“常用群”では、「どちらともいえない」は父親に多く、「ややそう思う」は母親に多かった。“非・常用群”では、「とてもそう思う」が父親より母親に多かった (表 5)。

## 3.5 チャイルドシートに対する認識

全体の結果を表6に示す。10項目において父母の違いが示された。

表6 チャイルドシートに対する認識の結果

※逆転項目

質問項目	項目の種類	常用群				非・常用群				
		父親 (N=122)	母親 (N=117)	$\chi^2$	Cramer V	父親 (N=30)	母親 (N=38)	$\chi^2$	Cramer V	
Q1	チャイルドシートは子どもを守るために必要なものだ。	正	4.39	4.80	**	0.275	4.07	4.84	**	0.498
Q2	子どもを車に乗せる頻度が少ないのなら、チャイルドシートを着けなくても良い。	誤※	4.19	4.68	***	0.301	4.20	4.47		0.175
Q3	近所に買い物などに出かける程度であれば、チャイルドシートを装着しなくてもかまわない。	誤※	4.20	4.59	*	0.221	3.93	4.32		0.233
Q4	周りがチャイルドシートを装着していないと、自分もしなくて良いと感じる	誤※	4.17	4.49		0.179	3.67	4.03		0.331
Q5	嫌がる子どもをチャイルドシートに装着させていると、周囲の人に批判的な目で見られたり、いわれたりしそうだ。	誤※	4.08	4.04	**	0.237	3.60	4.11		0.373
Q6	チャイルドシートは本当に効果があるのか疑問だ。	誤※	3.92	4.18		0.160	3.60	4.29	*	0.404
Q7	義務なので装着しているが、実際に効果を試すような事故に遭うことはないと思う。	誤※	3.70	4.08		0.197	3.77	3.87		0.187
Q8	子どもがぐずるのであれば、親がシートベルトをして抱っこしたほうが安全だ。	誤※	3.96	4.15		0.152	3.90	3.76		0.178
Q9	慣れてしまえば子どもにとってチャイルドシートに装着させられることは苦痛ではない。	正	3.76	4.08		0.170	3.53	4.13		0.334
Q10	チャイルドシートの装着を嫌がって子どもがぐずると同乗者の機嫌が悪くなるので気を遣う。	誤※	3.66	3.47	**	0.253	3.47	3.26		0.239
Q11	友人や知人にチャイルドシートを使用していない人がいたら、使用するよう言う。	正	3.30	3.52		0.123	2.83	3.00		0.160
Q12	チャイルドシートは親の自己責任で着けるものである。	誤※	2.88	2.67		0.198	2.50	2.47	*	0.421
Q13	毎回チャイルドシートを装着するのは面倒だ。	誤※	3.25	3.14		0.179	2.53	2.61		0.355
Q14	子どもが機嫌よく着けさせてくれたら、今よりチャイルドシートを装着する頻度が多くなる	誤※	2.75	2.44	**	0.274	2.37	1.76		0.343
Q15	チャイルドシートを着けると車の中が狭くなる。	誤※	2.57	2.11	**	0.247	2.57	1.89	**	0.454
Q16	高速道路での走行では必ず装着した方が良い。	誤※	1.57	1.10	***	0.323	1.87	1.18	*	0.423

注) 表における評価の平均値は参考値である。

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

まず、「非・常用群」においてのみ父母の違いが見出された項目について報告する(表7)。『チャイルドシートは本当に効果があるのか疑問だ(誤)』( $\chi^2=11.07$ ,  $df=4$ ,  $p < .05$ ,  $Cramer V=.404$ )では、「ややそう思う」は父親の方が多く、「まったく思わない」は母親の方が多かった。『チャイルドシートは親の自己責任で着けるものである(誤)』( $\chi^2=12.05$ ,  $df=4$ ,  $p < .05$ ,  $Cramer V=.421$ )では、「どちらともいえない」は父親の方が多いことが示された。

チャイルドシート使用に関する安全意識と負担感

表7 “非・常用群” においてのみ父母間の差が示された項目の残差分析

※逆転項目

質問項目	項目の種類	性別	1	2	3	4	5	
Q6 チャイルドシートは本当に効果があるのか疑問だ。	誤※	父親	度数	0	5	9	9	7
		調整済み残差	-0.90	2.03	1.71	0.34	-2.66	
	母親	度数	1	1	5	10	21	
		調整済み残差	0.90	-2.03	-1.71	-0.34	2.66	
Q12 チャイルドシートは親の自己責任で着けるものである。	誤※	父親	度数	9	5	10	4	2
		調整済み残差	-0.81	-0.71	3.41	-0.57	-1.16	
	母親	度数	15	9	1	7	6	
		調整済み残差	0.81	0.71	-3.41	0.57	1.16	

注) 網掛け・太字は残差分析が5%で有意であることを示す。

次に、“常用群” においてのみ父母の違いが見出された項目について報告する (表8)。『子どもを車に乗せる頻度が少ないのなら、チャイルドシートを着けなくても良い (誤)』 ( $\chi^2=21.68, df=4, p<.001, Cramer V=.301$ ) では、「どちらともいえない」と「ややそう思う」において父親の方が多く、「まったく思わない」では母親の方が多かった。『近所に買い物などに出かける程度であれば、チャイルドシートを装着しなくてもかまわない (誤)』 ( $\chi^2=11.69, df=4, p<.05, Cramer V=.221$ ) では、「どちらともいえない」は父親の方が多く、「まったく思わない」は母親の方が多かった。『嫌がる子どもをチャイルドシートに装着させていると、周囲の人に批判的な目で見られたり、いわれたりしそうだ (誤)』 ( $\chi^2=13.37, df=4, p<.01, Cramer V=.237$ ) では、「どちらともいえない」は父親の方が多く、「ややそう思う」は母親の方が多かった。『チャイルドシートの装着を嫌がって子どもがぐずると同乗者の機嫌が悪くなるので気を遣う (誤)』 ( $\chi^2=15.28, df=4, p<.01, Cramer V=.253$ ) では、「どちらともいえない」は父親の方が多く、「とてもそう思う」は母親の方が多かった。『子どもが機嫌よく着けさせてくれたら、今よりチャイルドシートを装着する頻度が多くなる』 ( $\chi^2=17.91, df=4, p<.01, Cramer V=.274$ ) では、「どちらともいえない」と「ややそう思わない」において父親の方が多く、「とてもそう思う」は母親の方が多いことが示された。

表8 “常用群” においてのみ父母間の差が示された項目の残差分析

※逆転項目

質問項目	項目の種類	性別	1	2	3	4	5	
Q2 子どもを車に乗せる頻度が少ないのなら、チャイルドシートを着けなくても良い。	誤※	父親	度数	0	12	21	21	68
		調整済み残差	-1.02	1.98	3.21	1.56	-4.22	
	母親	度数	1	4	5	12	95	
		調整済み残差	1.02	-1.98	-3.21	-1.56	4.22	
Q3 近所に買い物などに出かける程度であれば、チャイルドシートを装着しなくてもかまわない。	誤※	父親	度数	3	6	20	28	65
		調整済み残差	0.97	0.96	2.30	1.30	-3.24	
	母親	度数	1	3	8	19	86	
		調整済み残差	-0.97	-0.96	-2.30	-1.30	3.24	
Q5 嫌がる子どもをチャイルドシートに装着させていると、周囲の人に批判的な目で見られたり、いわれたりしそうだ。	誤※	父親	度数	3	5	24	37	53
		調整済み残差	-0.78	-2.43	2.03	1.90	-1.48	
	母親	度数	5	15	12	23	62	
		調整済み残差	0.78	2.43	-2.03	-1.90	1.48	
Q10 チャイルドシートの装着を嫌がって子どもがぐずると同乗者の機嫌が悪くなるので気を遣う。	誤※	父親	度数	4	13	41	26	38
		調整済み残差	-2.73	-1.27	2.43	1.55	-1.05	
	母親	度数	15	19	23	16	44	
		調整済み残差	2.73	1.27	-2.43	-1.55	1.05	
Q14 子どもが機嫌よく着けさせてくれたら、今よりチャイルドシートを装着する頻度が多くなる	誤※	父親	度数	24	20	54	11	13
		調整済み残差	-2.53	-1.14	3.16	2.12	-1.27	
	母親	度数	40	26	29	3	19	
		調整済み残差	2.53	1.14	-3.16	-2.12	1.27	

注) 網掛け・太字は残差分析が5%で有意であることを示す。

最後に，“常用群”でも“非・常用群”でも父母差が見出された項目について記述する（表9）。『チャイルドシートは子どもを守るために必要なものだ（正）』（順に， $\chi^2=18.06$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.275$ ,  $\chi^2=16.88$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.498$ ）では，“常用群”は，「どちらともいえない」と「ややそう思わない」において父親の方が多く，「とてもそう思う」は母親の方が多かった。“非・常用群”では，「どちらともいえない」は父親の方が多く，「とてもそう思う」は母親の方が多かった。『チャイルドシートを着けると車の中が狭くなる（誤）』（順に， $\chi^2=14.55$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.247$ ,  $\chi^2=14.02$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ ,  $Cramer V=.454$ ）では，“常用群”で，「どちらともいえない」は父親の方が多かった。“非・常用群”では，「ややそう思う」は父親の方が多く，「ややそう思わない」は母親の方が多かった。『高速道路での走行では必ず装着した方が良い（誤）』（順に， $\chi^2=24.87$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ ,  $Cramer V=.323$ ,  $\chi^2=12.15$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ ,  $Cramer V=.423$ ）では，“常用群”で，「どちらともいえない」は父親の方が多く，「とてもそう思う」は母親の方が多かった。“非・常用群”では，「どちらともいえない」と「ややそう思わない」で父親の方が多く，「とてもそう思う」は母親の方が多かった。

表9 両群において父母間の差が示された項目の残差分析

質問項目	項目の種類	着用状況	性別	※逆転項目					
				1	2	3	4	5	
Q1 チャイルドシートは子どもを守るために必要なものだ。	正	常用群	父親	度数	2	4	16	22	78
			調整済み残差	0.54	1.98	2.71	1.93	-3.99	
		母親	度数	1	0	4	11	101	
		調整済み残差	-0.54	-1.98	-2.71	-1.93	3.99		
	非・常用群	父親	度数	1	2	8	2	17	
		調整済み残差	1.13	1.62	3.39	-1.16	-2.51		
		母親	度数	0	0	0	6	32	
		調整済み残差	-1.13	-1.62	-3.39	1.16	2.51		
Q15 チャイルドシートを着けると車の中が狭くなる。	誤※	常用群	父親	度数	24	45	28	10	15
			調整済み残差	-1.84	-1.85	3.04	0.67	1.43	
		母親	度数	35	57	10	7	8	
		調整済み残差	1.84	1.85	-3.04	-0.67	-1.43		
	非・常用群	父親	度数	6	10	6	7	1	
		調整済み残差	-0.61	-2.44	1.46	3.14	0.17		
		母親	度数	10	24	3	0	1	
		調整済み残差	0.61	2.44	-1.46	-3.14	-0.17		
Q16 高速道路での走行では必ず装着した方が良い。	誤※	常用群	父親	度数	83	15	18	6	-
			調整済み残差	-4.68	1.69	3.97	1.862	-	
		母親	度数	108	7	1	1	-	
		調整済み残差	4.68	-1.69	-3.97	-1.86	-		
	非・常用群	父親	度数	18	3	5	3	1	
		調整済み残差	-2.84	0.30	2.61	1.99	0.17		
		母親	度数	34	3	0	0	1	
		調整済み残差	2.84	-0.30	-2.61	-1.99	-0.17		

注) 網掛け・太字は残差分析が5%で有意であることを示す。

#### 4. 考察

本研究では，チャイルドシート使用の実態について，使用場面における負担感，知識や認識について父母間の違いを調査した。参加者の特徴として，学歴・世帯年収など日本の平均的な家庭を対象に行われた。職業については，父親は働いている人がほとんどであったが，母親は60%程度が専業主婦であり，80%以上の家庭が核家族であった。また，車を運転する場面においても，母親は子どもを乗せる頻度が高かった。従って，子育てという点では母親が中心となって行われている家庭が多かったと考えられる。

チャイルドシートの使用状況から，警察庁（2022）よりは少ないものの，父母ともに20%前後は自家用車

で着用しないことがある、という結果が得られた。母親では、親族や知人が運転する車になるとさらに増加し、40%前後で着用しないことがあるという回答になった。父親よりも母親の方が相手によって行動を変えてしまう割合が高いといえる。しかし、ドライバが他者の時に子どもにチャイルドシートを着用しないことは、他者に交通違反をさせることになり、事故が発生した時の結果も責任も重くなる。一時的な手間や気まずさではなく、重大な結果につながる可能性があるという点についての理解を促進する必要があるだろう。

次に、チャイルドシートを使用する際の負担感の結果から、天気が悪い、荷物が多い、子どもの機嫌が悪い、ベビーカーから乗せ換えるといった場面で、常にチャイルドシートを使用する母親にとっては大きな負担感につながることを示された。子どもの機嫌が悪いという場面は、着用しないこともある母親にとっても負担感につながっていた。天気、荷物、乗せ換えといった場面の負担感からは、チャイルドシートは単に車両に設置すれば使うというのではなく、どうすれば日常的に負担なく使えるかということを考えなければならないことが示された。今後はチャイルドシートの操作性だけではなく、駐車スペースの環境なども重要になる。少なくとも、未就学児を乗せた車が多く訪れる施設や環境では、上記の場面で負担感が少ないと感じられるような駐車スペースにすることによって、都合の良い解釈で着用しないという現象は減らせるかもしれない。

チャイルドシートに対する知識については、母親よりも父親の方が不足していることが示唆された。“常用群”であっても、『チャイルドシートを着用している時と、着用していない時とでは、それほど死亡率は変わらない』、『3列シートの最後列は安全なので、6歳未満でも最後列に乗せる場合にはチャイルドシートは必要ない』、『チャイルドシートは助手席に取り付けた方が、安全である』、『時速30km程度の走行なら、チャイルドシートを装着しなくてもさほど危険ではない』という項目で「まったくそう思わない」という正しい回答は父親で少なく、「どちらともいえない」という曖昧な回答は父親の方が多かった。これはこの調査に参加した父親は子育てに関わる機会が少ないことが推測され、知識不足のため自信を持って正しい回答ができなかったと考えられた。

この傾向は、認識についての質問でも見られ、『チャイルドシートは子どもを守るために必要なものだ』や『子どもを車に乗せる頻度が少ないのなら、チャイルドシートをつけなくても良い』など、複数の質問で「どちらともいえない」が母親よりも多かった。反対に「とてもそう思う」（逆転項目の場合は「まったく思わない」と）と正しく明確な回答は母親の方が父親より多く、母親のCPS意識は父親より高く自信もある場合が多いと考えられる。しかしながら、現状は父母ともに自己流で情報収集せざるを得ない環境であり、母親の知識や認識が十分である訳ではない。正しく知識を身につけ、CPS意識を高くする機会は父母ともに今後必要になってくると考えられる。

また、常に着用している母親では『チャイルドシートの装着を嫌がって子どもがぐずると同乗者の機嫌が悪くなるので気を遣う』、『子どもが機嫌よく着けさせてくれたら、今よりチャイルドシートを装着する頻度が多くなる』という項目で「とてもそう思う」という回答が多かった。母親は知識を持っていても、周囲の目や状況を気にしている人もいることが示された。このような行動は、相手によって行動を変えるという使用状況の結果とも一致する。チャイルドシートの利用については、利用者の理解が第一であるが、周囲の人もどのようなものか理解しない限り、利用者の精神的な負担が減ることはない。従って、単に利用する家庭内で知識や意識を高めていくだけではなく、利用したことがない人もどのようなものか理解できる環境を整え、理解や協力が得られる環境を整えることも重要である。

## 5. まとめ

本研究では、チャイルドシート使用調査を行い、着用率、負担感、チャイルドシートに対する知識や認識について父母間の比較を行った。結果から、依然として着用しない人がいることとともに、着用を阻害する問題点も明確になった。まず、チャイルドシートを着用する時に、特に常にチャイルドシートを使用する母親の負

担感が強くなる場面が示された。天気が悪い時、荷物が多き時、ベビーカーからの乗せ換えなどがスムーズに行える駐車環境の整備によって、チャイルドシート使用の負担感が軽減され、利用が促進される可能性がある。また、チャイルドシート使用の知識・認識については、母親よりも父親の理解や安全意識が低い可能性が示された。これは父親が単独で子どもの世話をする時に、安全性の確保が不十分になると考えられる。加えて、母親は子どもの機嫌や周囲の反応を気にしながらチャイルドシートを使用しており、場合によっては使用しないこともある、という側面が示された。父親・母親の知識や意識を高めただけではなく、チャイルドシートを使用しない人も知識や意識を高められる社会的な取り組みが必要と考えられる。

今回の調査は Web で行われており、ミスユースなど使用時の具体的な問題点については明確にできなかった。また、示された対策や改善点について、誰がどのように進めるのかは明示できていない。チャイルドシートの着用率を改善するためには、今後これらの側面を詳細に検討する必要がある。

## 謝 辞

本研究は愛知淑徳大学研究助成（特定課題研究：19TT06）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 井上信明・小松原明哲・岸部 峻・酒谷 修（2015）. 小児医療関係者のためのチャイルドシート・ジュニアシート着用に関する教育ツールの開発 タカタ財団助成研究論文集 2015年度版（本報告）, 1-32.
- 警察庁（2022）. 子供を守るチャイルドシート, 警察庁 HP. Retrieved from <https://www.npa.go.jp/bureau/traffic/anzen/childseat.html> (November 11, 2022)
- 椿 知恵・中嶋有加里・山田加奈子・町浦美智子（2013）. 欧米の医療分野における乳幼児用チャイルドシート着用教育とその効果に関する文献検討 大阪府立大学看護学部紀要, 19(1), 81-86.
- 中田恵美・江幡芳枝（2013）. 乳児をもつ母親のチャイルドシートに対する知識・認識と使用の有無との関連 国際医療福祉大学学会誌, 18(1), 7-18.
- 日本自動車連盟（2022）. はじめてのチャイルドシート クイックガイド, 日本自動車連盟 HP. Retrieved from <https://jaf.or.jp/common/safety-drive/protect-life/child-seat> (November 11, 2022)